



工芸界からやってきた修行者

近年、工芸の分野に属している作家たちが、コンテンポラリーアートの領域で発表することが頻繁に見られる。幕末以降西洋文化の流入によって分離された両者が、再び融合するのではと見られる考えもある。しかしそう考えるよりも、美術と工芸それぞれの意味・あり方を改めて捉えなおす恰好の機会と捉えるべきではないだろうか。あらゆる分野でボーダーレス化が進んだ要因として、歴史的な文脈をたどりながら新たな価値観を創出できなくなった現状を打破するために、異分野の技術や発想を単純に「引用」してきたことが挙げられる。特に美術にとって、伝統の名の下に限られた場で純粋に技術力を深めていた工芸は、自らの分野に「引用」するには比較的容易であったように思われる。つまり工芸の最も中心にあるアイデンティティは、「技術」なのである。しかしながら、限定された素材や技法でいかに時代性を加味して新しいものを作り出すかを追究してきた工芸が、現在美術界がおこなっている異分野の引用を、以前から自然におこなっていたことに私たちは気がつかなければならない。

実用のもを製作することを主とする「応用芸術」としての工芸は、近世以降輸入される欧米の技術や発想を、日本の文化・価値観をベースに咀嚼しながら日常性の強いものを作り続けてきた。その日本固有の価値観の中にある「染色」をツールに、新しい表現を模索し続ける加賀城健。あくまでも彼の制作理念の中心にあるのは、染色技術としては存在しているが伝統の中でタブーとされる、にじみ・ぼかしなどの技法を用いて、複製できない1点のみの作品を作り上げることである。一般的な染色界の表現の内で制作されるならば、ただの奇をてらうものでしかない。また近年、他の若手染色作家の中に具象絵画のような表現のものが目立つが、それらは図案として美術的絵画から引用してきたに過ぎない。加賀城は染色の技法というまず工芸の立場に立って、そのアイデンティティを再考するところから始めた。伝統の中で隅に追いやられていた技法を見出し、それらが染色界の表現の広がりを生み出す可能性があると感じて、美術界のあらゆる表現方法にそのヒントを求めてこの場に辿りついたのである。糊を指で直接布上に落としたり、シルクスクリーンのスキージーでこすり付けたり、更には下図を作らずに即興的に染料を落とし込むなど、これまでの染色にはほとんど見られることの無かった身体感覚を作品に反映させるものが、みずみずしい表現として評価を受けてきた。

そして、コンテンポラリーアート専門のギャラリーでの初めての個展となる当展では、彼の有機的な側面が全面に現れた。従来のソリッドなDischarge(脱色)シリーズと新作のFold(折り畳み)シリーズがそれぞれの空間を侵食しあう、彼の新しいインスタレーションスタイルが開拓された。非複製にこだわり続けてきた彼が、作品の本質の一つでもある有機的な世界観をギャラリー空間の中で躍動するインスタレーションを実現させたのである。素材感の中心にある平面性、モノクロとカラフルの両面が織り成す「染め」の技術、そして彼の動的な身体を基軸とした造形力。コンテンポラリーアートの場の意味を咀嚼しつつ、ボーダーレスでかつ新感覚の空間がここに広がっている。

加賀城は、基本的に自らの分野の伝統を尊重し続ける工芸の作家である。工芸独特の制限された表現方法に縛られること無く、従来の技術と異分野の表現双方に敬意を表しながら両者を融合させて新たな表現を作り出す加賀城は、正統な染色界の開拓者として今後評価されていくであろう。私の眼から見て、彼は決してコンテンポラリーアートに傾倒した工芸作家ではない。異分野からコンテンポラリーアートの世界に門を叩いてやってきた、礼儀正しい修行者なのである。